

臨床所見

- 35 歳 女性

- 現病歴:

当科初診1ヵ月前 左膝内側痛を自覚

左大腿骨顆部骨腫瘍の診断で当科紹介

切開生検術で骨巨細胞腫と診断

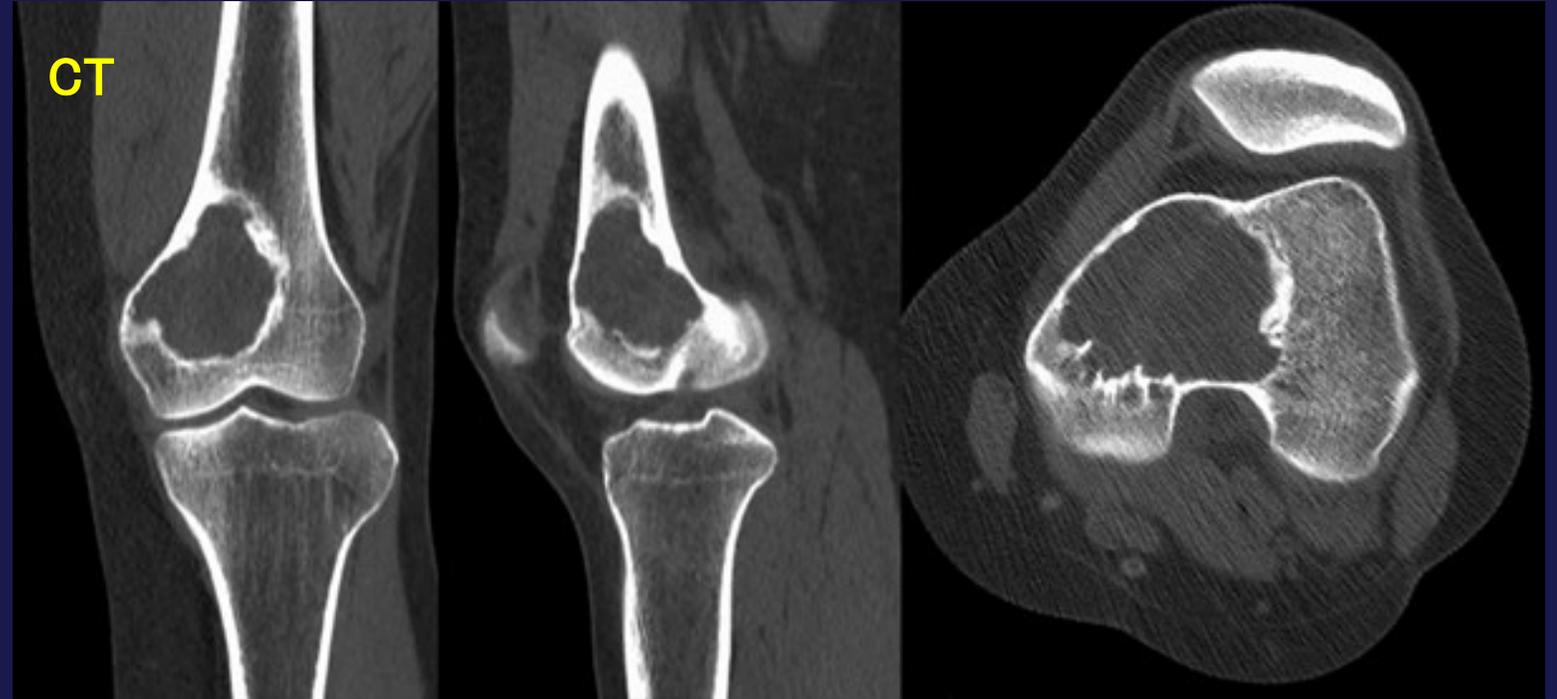
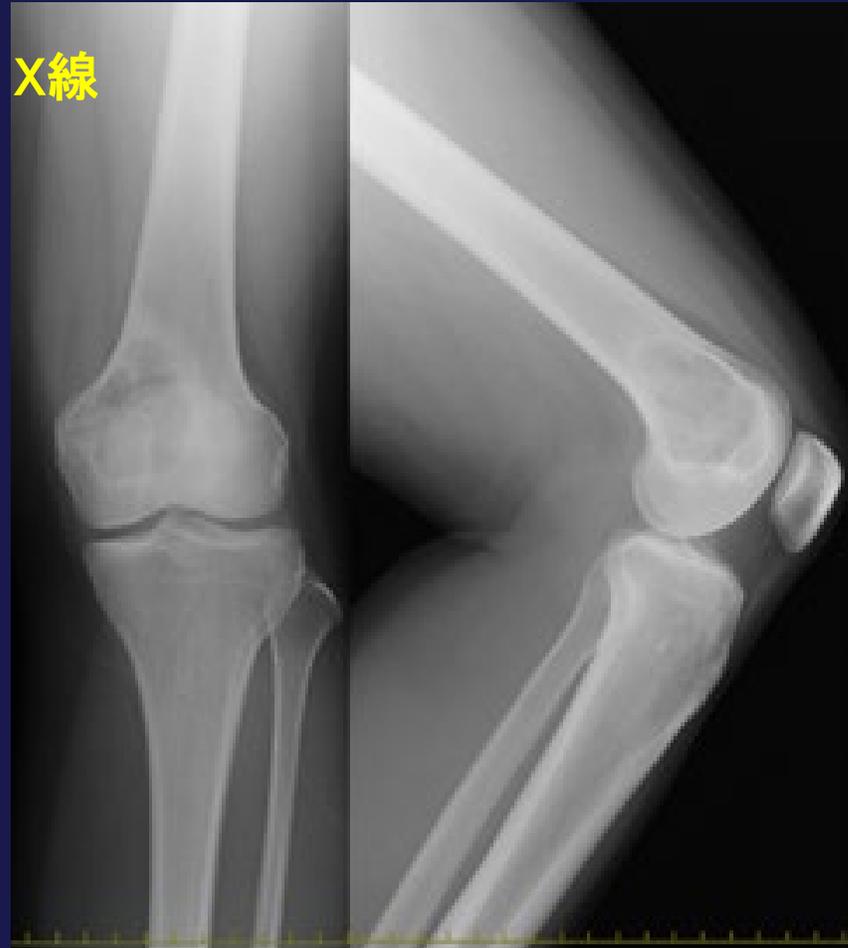
骨腫瘍搔爬・骨移植・内固定術を施行

術後2年時 骨移植部周囲に骨硬化像を認めた

臨床所見

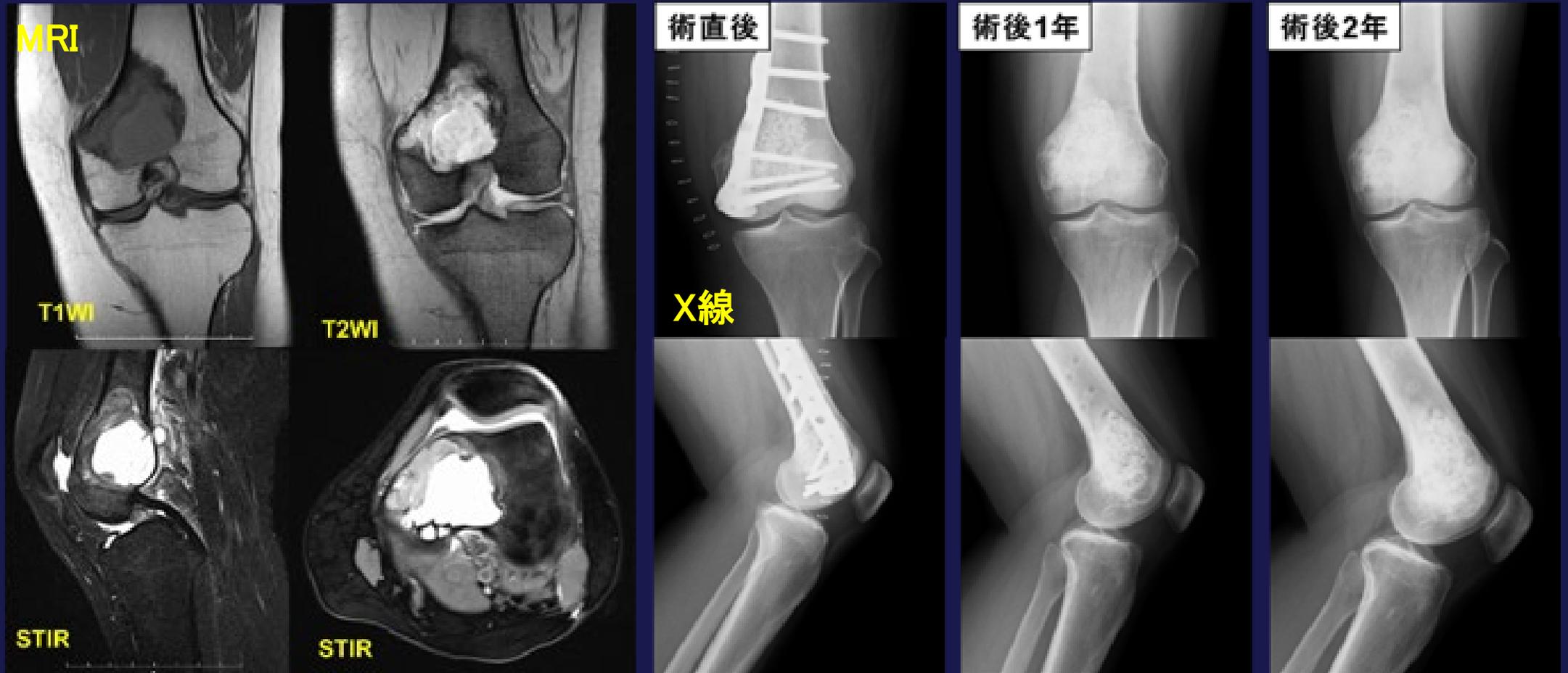
- 既往歴：特記事項なし
- 併存症：特記事項なし
- 家族歴：特記事項なし
- 局所所見：左膝痛あり，熱感なし，腫脹なし
- 検査所見：WBCやCRPの上昇なし，貧血なし

画像所見 – 初診時X線とCT



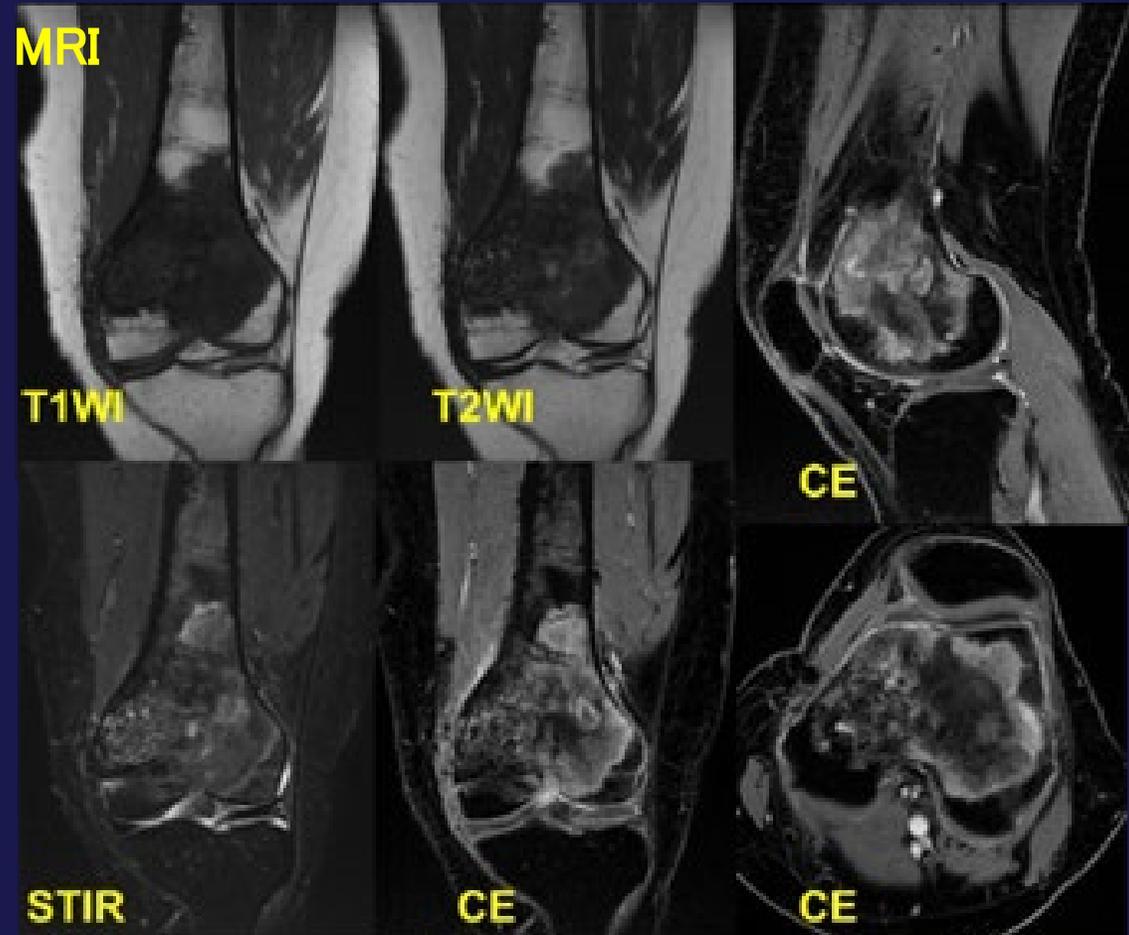
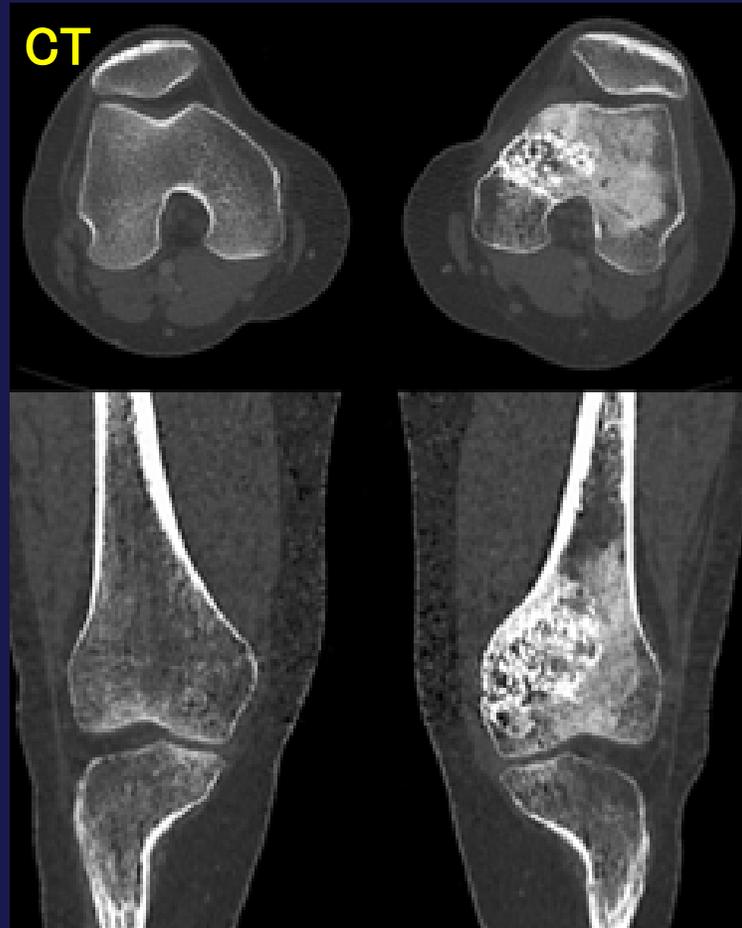
左大腿骨遠位内側骨幹端部に骨透亮像と
辺縁硬化像を認めた。

画像所見 – 初診時MRIと初回術後からのX線経過



内部の信号はT1で低信号，T2および脂肪抑制像で高信号であった。
術後2年時に搔爬部の周囲に骨硬化像を認めた。

画像所見 – 術後2年時のCTとMRI



初回搔爬部の周囲に骨硬化像を認めた。

内部の信号はT1とT2で低信号，脂肪抑制像で高信号，造影条件では不均一な造影効果を認めた

画像診断

左大腿骨遠位部骨巨細胞腫
術後悪性転化の疑い

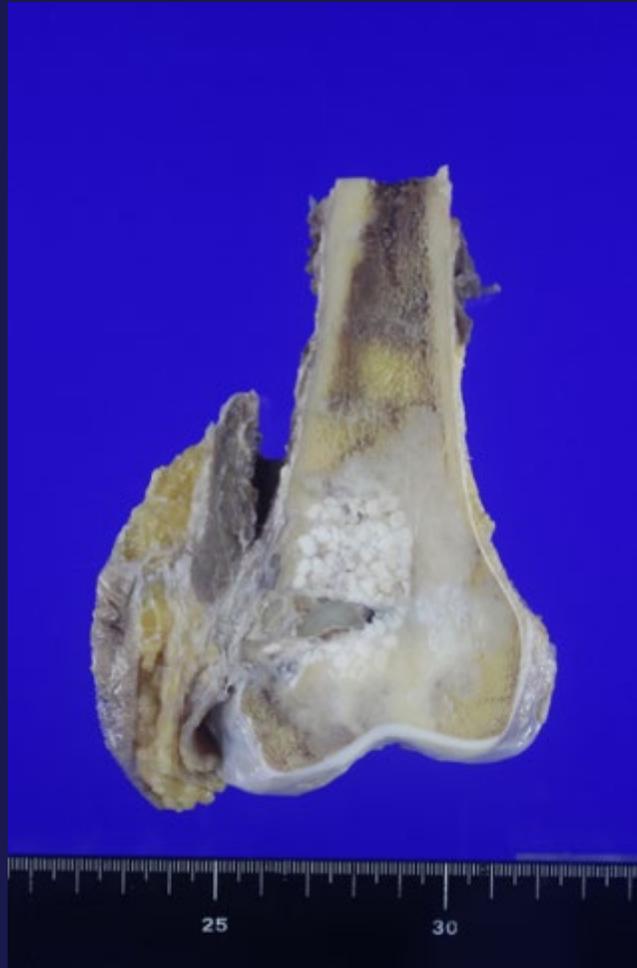
画像上の鑑別診断

低悪性度または高悪性度の骨肉腫

骨巨細胞腫の再発

骨髓炎

肉眼所見

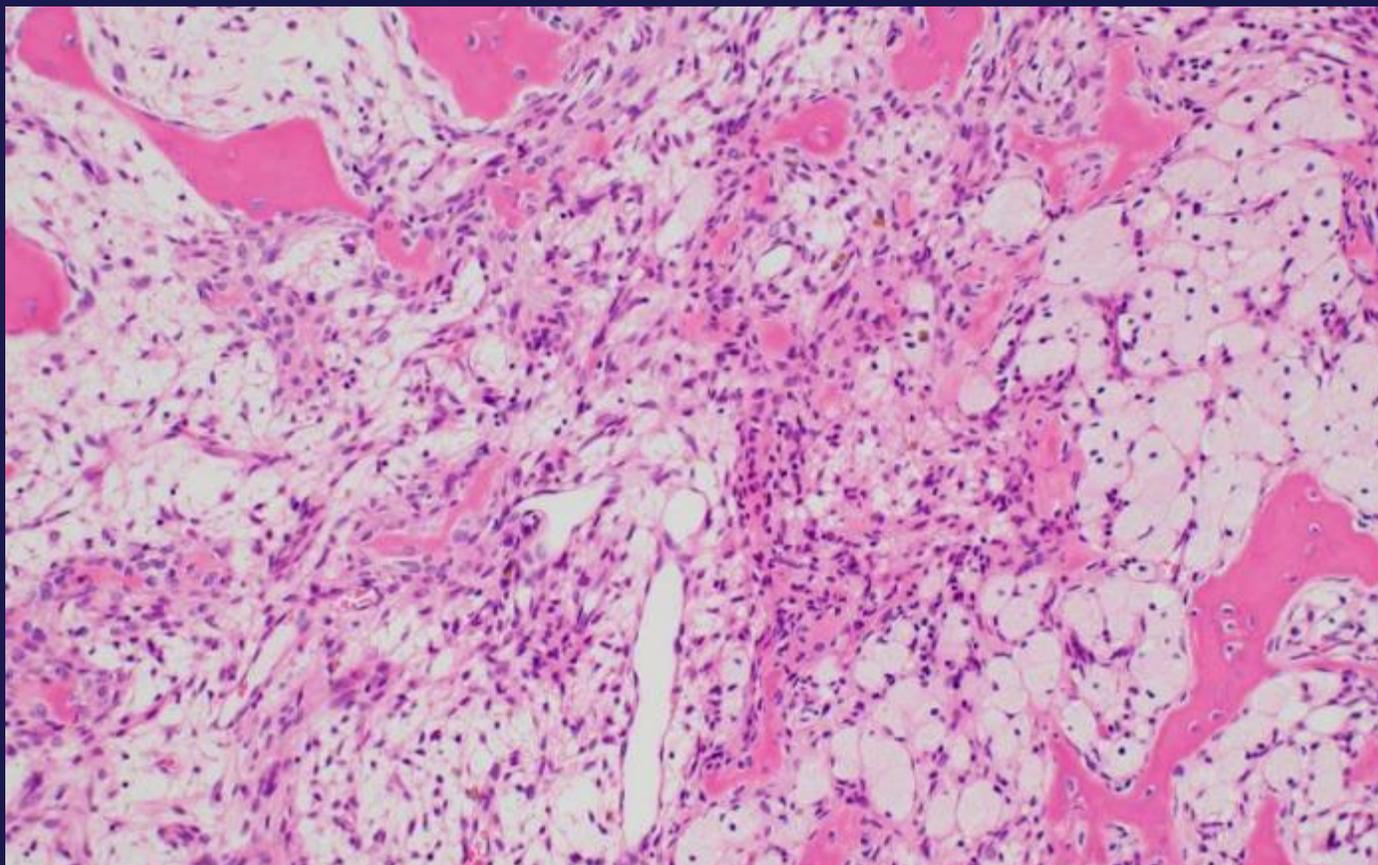


大腿内側の軟部組織から大腿骨遠位部まで、生検経路および病変部が一塊として切除されている

CTで骨硬化を認めた初回搔爬部周囲に白色の硬化性病変の造成を認める

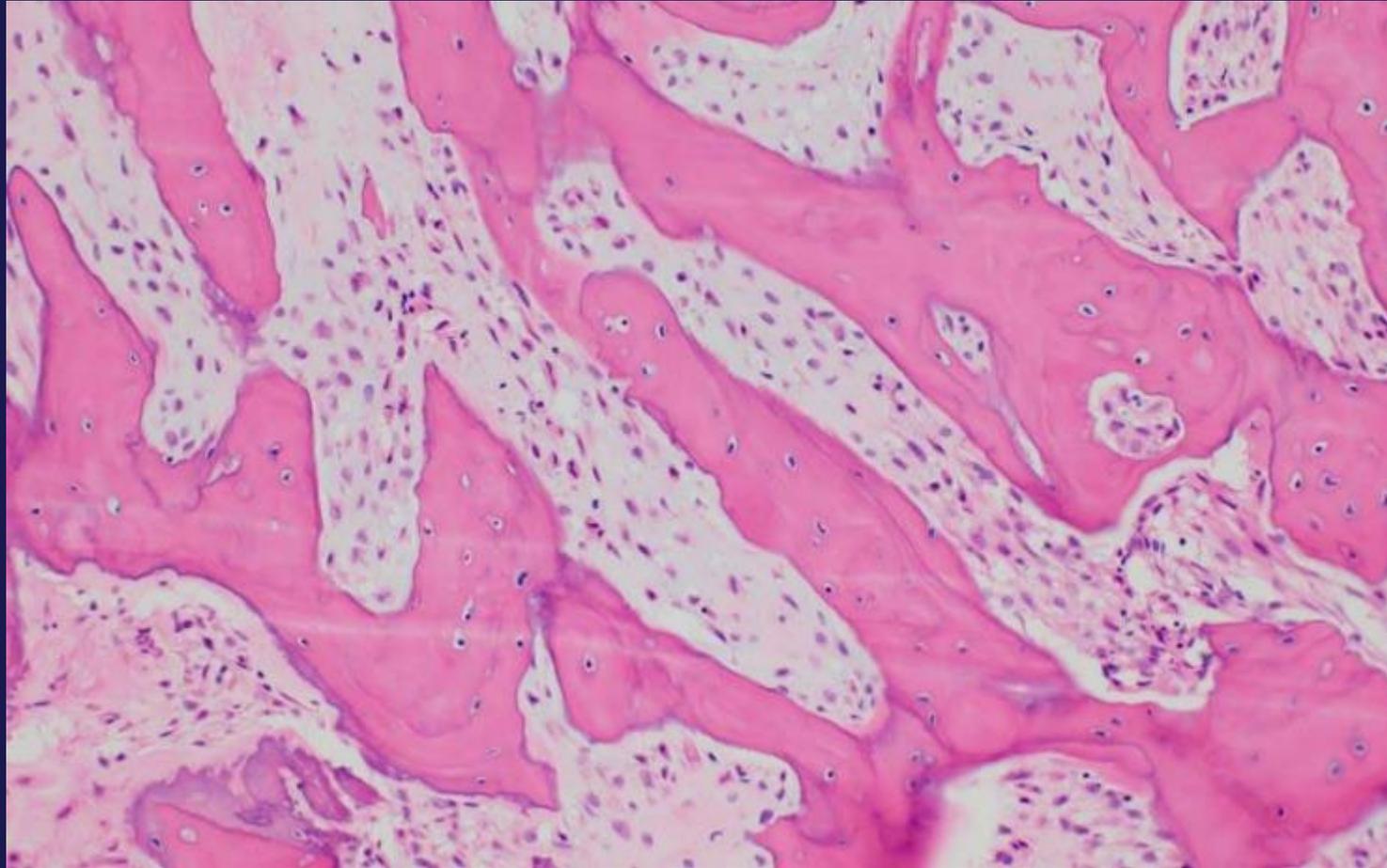
搔爬部に移植した人工骨の溶解や感染を想起させる骨溶解は認めない

病理組織学的所見-初回生検標本



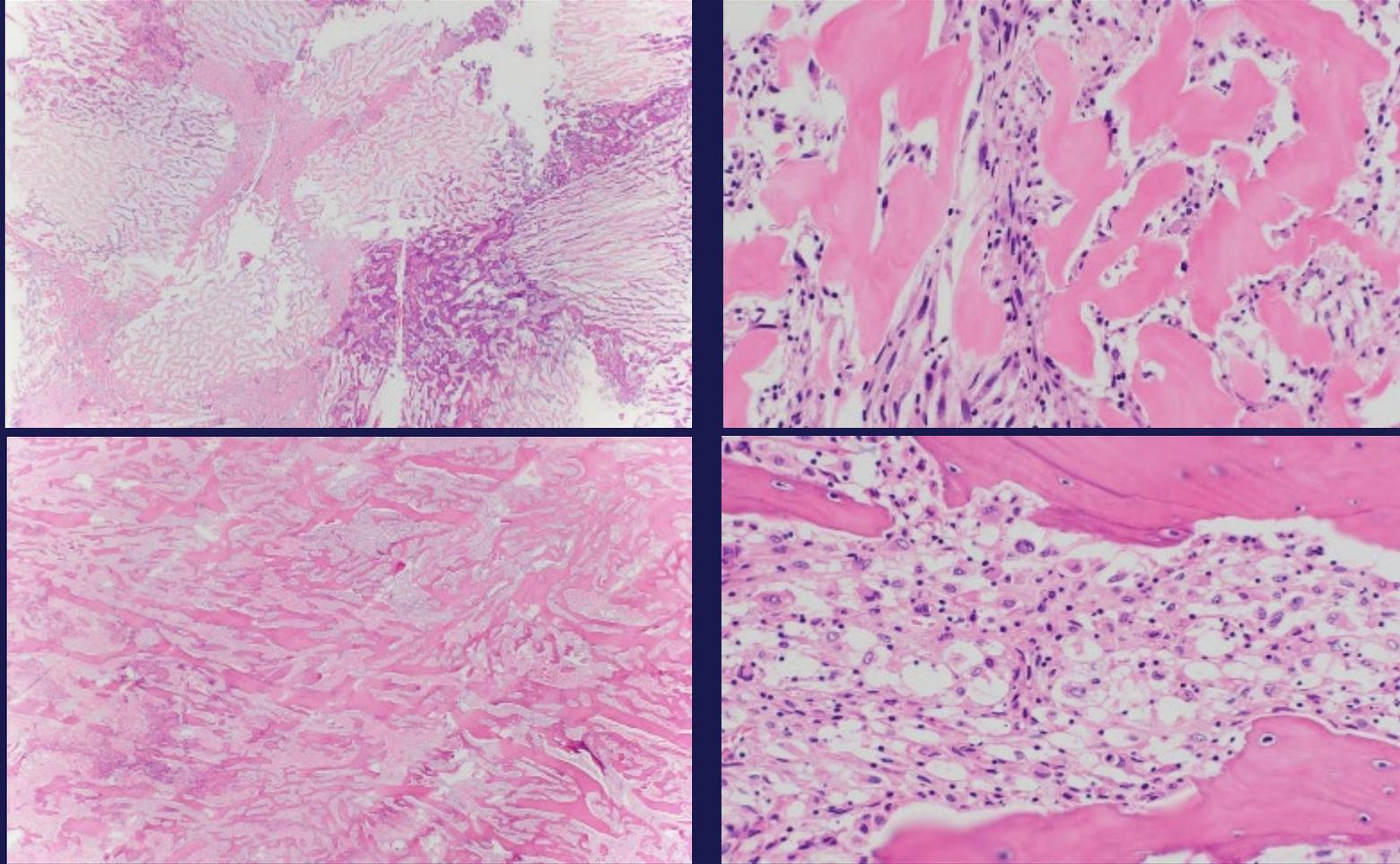
単核の紡錘形の間質細胞が増生し、類骨も認める。少数の破骨細胞様多核巨細胞も混在している。核分裂像は目立たない。

病理組織学的所見—術後2年時の生検標本



異型に乏しい紡錘形腫瘍細胞が線維性間質と不整類骨を伴って増生している。

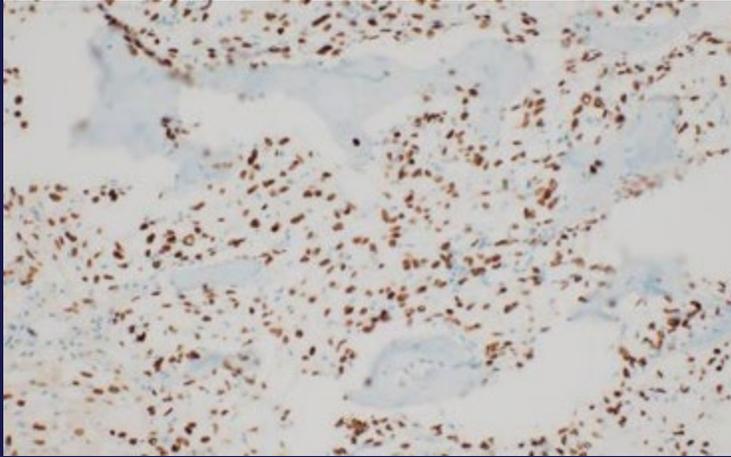
病理組織学的所見—術後2年での広範切除時の標本



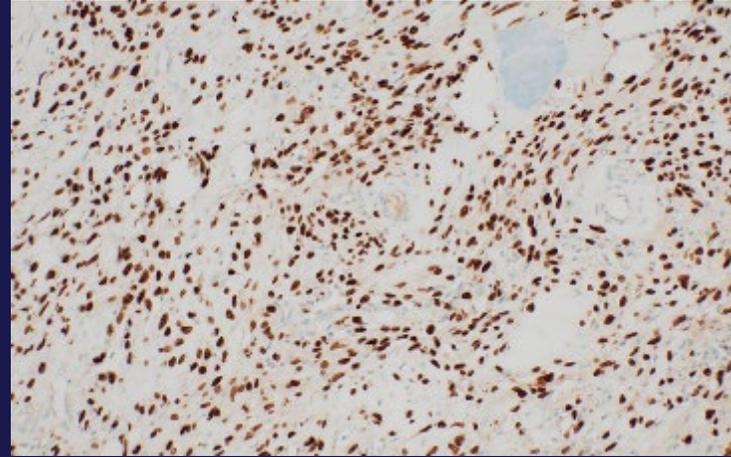
2年時生検標本と同様，弱異型紡錘形腫瘍細胞が不整類骨を伴って増生している。核分裂像は少ない。

免疫染色所見

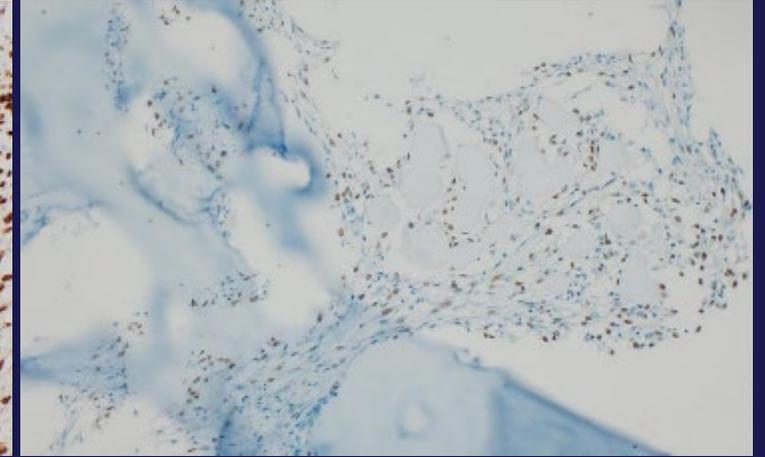
初回掻爬時 H3.3G34W+



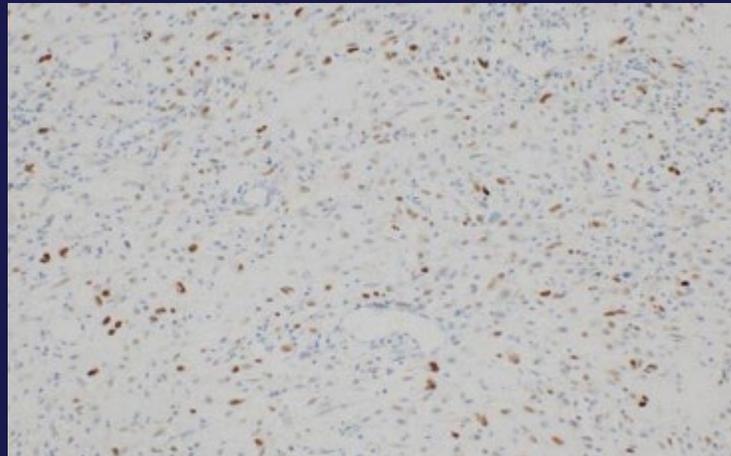
術後2年時生検標本 H3.3G34W+



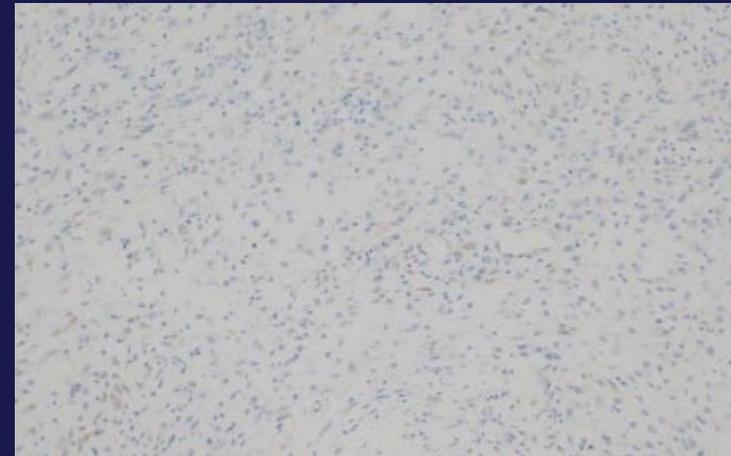
術後2年での広範切除標本 H3.3G34W



術後2年時生検標本 MDM2+



術後2年時生検標本 CDK4 focal+



免疫染色所見

	H3.3G34W	MDM2	CDK4
初回掻爬後	+	-	-
PO2Y生検	+	+	+
PO2Y広範切除後	+	施行せず	施行せず

病理学的診斷

低恶性度中心性骨肉腫
二次性恶性骨巨細胞腫

治療後の経過

初回術後から2年時に広範切除術および腫瘍用人工膝関節置換術を施行した。

術後2年7か月の現在、再発および遠隔転移なく経過している。

本例が極めて興味深い症例であることの要点(ここに最終診断名は記載しないでください)

骨巨細胞腫が二次性に低悪性度肉腫へ悪性転化することは極めて稀であり、その期間も2年と短い点

追加事項(何か特記事項があれば記載ください)

初回生検標本では免疫染色でMDM2およびCDK4が陰性でしたが、本症例が初回より低悪性度中心性骨肉腫（一次性悪性骨巨細胞腫）であった可能性は否定できず、初回の診断については本症例で十分吟味されるべき点と考えます。